

現代の子どもの友人関係の特質

The Distinction of Today's Children's Friendship

遠藤 忠 (宇都宮共和大学シティライフ学部)

長田 勇 (現代教育実践問題研究会代表)

櫻井 誠 (元三重大学大学院)

高林直人 (静岡県教育委員会)

Tadashi Endo (Utsunomiya Kyowa University, City Life Department)

Isamu Osada (The Cap of The Study Group about Present Education Practice Problems)

Makoto Sakurai (ex-Mie Graduate School Student)

Naoto Takabayashi (Shizuoka Prefectural Board of Education)

【概略】

2003年に長田(研究協力=櫻井)は「少年の世界—世代間比較調査—」を実施し、その結果から「現代の子どもは、祖父母世代および父母世代の子ども時代に比べると、友人関係にかなりナーバスになっている傾向がある」と分析した。その10年ほどあとの2014年時の子どもの友人関係はどうなったか? ナーバスさは昔に比べると同傾向である。しかし、子どもだけを比較するとナーバスさはやや軽減された。教師との関係の良好化がその一因といえる。本研究はそれを実証した。

【キーワード】 友人関係, ナーバス, 学校適応

1 研究の課題、目的

自己の形成は人間関係が大きく影響する。子どもであればなおさらであり、子どもの人間関係においては、友人関係が多くを占める。

いつの時代でも、子どもは友人関係について「楽しさ」を語ることが多い。しかし、その一方で、それとは背反する「つらさ」を語ることもある。先行研究としての調査において、藤田英典らは「グループ内での軋轢や葛藤」¹⁾を指摘し、中島喜代子らは「友達に気を遣う」²⁾傾向を示唆する。岡田努は、そうした「つらさ」の中で「傷つけ回避」³⁾などを同時に感じていることを明らかにしている(これらの先行研究については櫻井の総括⁴⁾を参照されたい)。

しかし、それらの調査は、現代の子どもの動態を調査したにすぎず、過去との比較ができていないうえ、子どもの自己認識との関係も明らかにできていない。

本研究は、同じ質問紙を用いた世代間調査により、過去と比較可能な現代の子どもの特質と、子どもの友人関係のマイナス面と自己認識との関係を明らかにした。これは、

学校における人間関係を通じた生徒指導の方策に寄与することを目的とした基礎研究である。

なお、本研究は学術研究助成基金助成金（研究代表遠藤忠、基盤研究（C）課題番号26381282）を受けて行われた。

2 調査内容概略

2.1 2014年時調査内容概略

(1) 調査対象：小学5年生，中学2年生，高校2年生

(2) 調査地域：つぎの方法により調査地域を選定した。①全国を北海道東北地方から九州地方まで通常の地方分割により7地域に分ける（北海道は東北と合体）。②その中の東京23区，神奈川県横浜市，愛知県名古屋市，大阪府大阪市は都市部として別建てとする。③それらの都市部を除く7地域で小中高それぞれの学校総数がそれぞれの地域の間値を示す県を選定する。④層化割り当て無作為抽出法（その各県および各都市部の小中高それぞれの学校総数に比例させて各地の抽出校数を割り当て，『全国学校総覧』（原書房）に基づいて乱数表で小中高を無作為抽出する方法）により調査校を選定。ただし，児童生徒が全学年で100名以上の学校に限定。⑤該当の各校に調査協力を依頼する。

協力をいただいた地域と学校数はつぎのとおり。

小学校＝青森2，茨城2，東京1，横浜2，石川1，和歌山1，山口3，徳島1，大分2

中学校＝青森3，茨城3，東京3，名古屋1，岡山2，徳島1，沖縄3

高校＝石川1，三重1，山口1，徳島1，大分1（総計36校）

(3) 調査方法：託送調査，質問紙法（質問紙ははじめから封筒に入れてあり，それが教師から児童生徒に渡り，家で回答して封筒に厳封し，教師に返却される。事情により二校では教室内で回答）。

(4) 回答票数：小学731票（回収率97.0%），中学1,442票（89.4%），高校1,218票（79.5%）

(5) 有効票数：全問無答，いい加減な回答は無効票，質問ごとの無答は無答票として処理（本文の表を参照のこと。各問の無答も表では除外している）。

(6) 調査期間：2014年10月～12月。

2.2 2003年調査内容概略

調査方法は2014年と同じだが，子どもの家族の祖父母と父母も調査対象で，「世代間比較調査」をおこなった。調査地域＝岩手，栃木，東京，新潟，静岡，愛知，大阪，岡山，愛媛，熊本，沖縄の小中高計26校＋幼稚園10園（幼児は調査対象外）。回答票数＝小学5年894票，中学2年691票，高校2年924票，父親（平均年齢43.0歳）2,397票，母親（39.9歳）2,705票，祖父（69.8歳）457票，祖母（68.0歳）661票。調査期間＝2003年2月～7月。

3 調査結果の概略（2003年調査と2014年調査の比較）

結果としてつぎの三点が挙げられる。

(1) 2003年調査時点の祖父母世代および父母世代の子ども時代と比較すると、同調査時点の子どもと同様に、いまの子どもも友人関係にナーバスになっているといえる。

(2) しかし、2003年の子どもと2014年の子どもを比べると、いまのほうが友人関係にナーバスさを感じる層がいくらか減少している（以下、「ナーバスさの低減」等と略記する）。

(3) 子どもと教師との関係もいくらか良好化している（これが上のナーバスさの低減に関連していると思われる）。

なお、「友人関係におけるナーバスさ」については2003年の学会発表および論文⁵⁾ですでに述べているが、以下の論議の前提として、あらためて若干の説明しておく。

「ナーバス」とは、一般にいう「神経質、神経過敏」の意味で、あることに意識が負の状態にとらわれてしまうことをいう。それが悩みを醸成し、ストレスを生む。友人関係にナーバスになるというのは、友人との心理的な距離がうまくコントロールできないという負の心理状態で友人関係に意識がとらわれてしまうことである。

「好きな人もいれば、きらいな人もいる」というのは当たり前のことだから、通常は「この人とはつきあうが、あの人とはつきあわない」という関係ができる。「自分は自分だ」という自律性が深部にあって、友人関係が選択的になるのだ。

ところが、そういう自律性が弱いと、関係が相手によっては受け身になり、「つきあいたくない」と思っているにもかかわらず、つきあわざるをえない状態に陥ることがある。そういう内の拒否心理と外の許容行動とのアンビバレントな状態がつづけば、友人関係にナーバスにならざるをえなくなる。

また、自律性が弱ければ、他と異なることに恐れを感じて他者の視線がつねに気になることもある。それが負の意味を帯びて、友人関係に意識がとられる。「自分は自分だ」という自己肯定感が育っていないことによる「ナーバス」の問題である。

4 2003年おとな世代、2003年子ども、2014年子どもの比較

4.1 「友だちのだれか」への接触拒否感

「そばに来ないでほしい、とあなたがいつも思う人はだれかいますか？」（おとな世代には「子どものころ、……いましたか」：複数回答可）

人への接触拒否感を単刀直入にたずねた問いである。「父、母、祖父、祖母、兄弟姉妹だれか、友だちのだれか、自分をいじめる人、学校のある先生、知っている異性のだれか、親せきの人、近所のある人、その他、そういう人はいない」という選択肢のうち「友だちのだれか」を選択した割合はつぎのとおりである（以下の統計のすべてにおいて、とくに断っていないかぎり、危険率1%未満で有意差を検証済みである）。

<表1> 「そばに来ないでほしい人はいるか」

	「友だちのだれか」を選択	総数(人)
2003祖父母	7.80%	1050
2003父母	9.90%	4976
2003子ども	21.60%	2477
2014子ども	19.60%	2953

2003年時の父母祖父母世代の方々が自分の子ども時代（中学生まで）を振り返ったときの数値と2003年と2014年の子どもたち（小中高全体）の数値との比較である。昔の子ども世代に比べると、ここ10年ほどのスパンで見ると現代の子どものほうが「友だちのだれか」への拒否感は圧倒的に多い。

しかも、「自分をいじめる人」が表1のどの世代とも15%前後であったので、現代の子どもは「友だちのだれか」が「自分をいじめる人」を上回ることになる（自分をいじめる人：2003祖父母14.2%，2003父母15.3%，2003子ども14.8%，2014子ども15.7%）。「自分をいじめる人」と「友だちのだれか」が重なって回答されたこともあるだろうが、現代の子どもの場合、少なくとも「いじめ」に関係のない友だち（単なるクラスメートを含んでいることはありうる）が拒否感の対象となっていることは確かである。

他にも「そばに来ないで」と思う対象はあるが、現代の子どもの場合は、「友だちのだれか」が第1位である（2003年祖父母：1位「いじめる人」、2位「友だちのだれか」、3位「学校のある先生」5.9%，2003年父母：1位「いじめる人」、2位「友だちのだれか」、3位「学校のある先生」8.8%，2003年子ども：2位「学校のある先生」18.2%，3位「いじめる人」、2014年子ども：2位「いじめる人」、3位「知っている異性」13.1%）。

4.2 ナーバスな状況1

「学校にいるとき何がいやですか？」（おとな世代には「小中学生時代、……何がいやでしたか？」：複数回答可）

学校でのつらさをたずねた問いである。「きれいな授業、つきあいで友だちと話したり遊んだりすること、いじめられること、先生のこと、クラブ・部活動、昼食、ホームルーム・学級会、運動会などの行事、学芸会や文化祭などの行事、その他、いやなことはない」のうち「つきあいで友だちと話したり遊んだりすること」が、いやと選択した人はつぎのとおりである。

<表2> 学校でいやなこと

	「つきあいで友だちと話したり遊んだりすること」を選択	総数
2003祖父母	2.5%	1084
2003父母	3.9%	5064
2003子ども	7.6%	2494
2014子ども	5.4%	2892

それほど高い数値ではないが、昔の子どもの2倍程度はいる。表1の「友だちのだれか、

そばに来ないで」とクロスさせると、つぎの表になる（祖父母の該当数が少ないので、父母と一括し「おとな」とする）。

<表3> 「友だちのだれか、そばに来ないで」×学校でいやなことは「つきあいで友だちと……」

		「つきあいで友だちと……」を選択	総数
「友だちのだれか、そばに来ないで」の選択者	2003おとな	8.60%	569
	2003子ども	17.30%	533
	2014子ども	13.30%	518

「友だちのだれか」の「だれか」と「つきあいで友だちと……」の「友だち」が一致することもあるが、必ずしも一致するわけでもない。別々の友だちであることもありうる。したがって、上のクロスは、友だちへの接触拒否感をもつ人は「つきあいで……」もいやがる、という傾向を見ているものでしかない。

しかし、その傾向こそが、負の心理で友だちに意識がとらわれている状態を示していることになる。上の二つはどちらも友だちへの負の心理状態を示しており、一方がいやならもう一方もいやになるのもうなずける。そういう状態が、現代の子どもの場合、昔の子どもよりもかなり増加しているありさまがここに見える。

クロスを逆にしても同じだ。

<表4> 「つきあいで友だち……が、いや」×「友だちのだれか、そばに来ないで」

	「友だちのだれか、そばに来ないで」の選択		総数
「つきあいで友だち……」の選択者	2003おとな	22.00%	223
	2003子ども	48.40%	190
	2014子ども	43.40%	159

「つきあいで……が、いや」ということは、外向きでは「つきあっている」のである。しかし、内心は「いや」だ。自分から積極的につきあうことはないはずである。相手がそばに来るから、受け身の心理でつきあう。その受け身心理が強ければ強いほど、拒否感が強まり、できれば「そばに来ないで」と思うにちがいない（弱ければ、そばに来てしまったのだから、面倒だけど仕方なしにしぶしぶつきあう、ということだろう）。

このクロスの場合も、両方の「友だち」が一致しているとはかぎらない。「つきあいで……」をいやがる人が友だちへの接触拒否感をもちやすいかどうかの傾向が見えるだけだ。しかし、どの世代もその数値が表3の場合よりも極端に多くなっている点から見ると、友だちづきあいが受け身になりがちな人の場合は、友だちへの接触拒否感をもちやすいことが示唆される。「つきあいで……」がいやだから、「そばに来ないで」と思うのは自然のことであろう。

その数値が約半数にも及ぶ現代の子どもは、昔以上に友人関係にナーバスになっている、と推測される。

4.3 ナーバスな状況2

「なにかをするとき、友だちにどう思われるか、ということが気になりますか？」(おとな世代へは「中学生までで、……気になりましたか?」)(以下、「友だちの視線が気になるか」と略記)

つぎの選択肢から一つ選ぶ。「たいてい気になる、気になるほうが多い、半々くらい、気になるほうが少ない、気にならない、その他」

〈表5〉 友だちの視線が気になるか。(「その他」は除く。以下同様)

	たいてい気になる	気になるほうが多い	半々	気になるほうが少ない	気にならない	合計	総数
2003祖父母	7.2%	11.9%	20.7%	21.5%	38.7%	100%	1074
2003父母	8.9%	23.1%	32.6%	20.2%	15.2%	100%	5062
2003子ども	19.4%	24.3%	33.6%	13.6%	9.2%	100%	2489
2014子ども	13.0%	17.4%	37.5%	15.9%	16.2%	100%	3102

「自分は自分だ」という自律性が育っていなければ、まわりの目が気になる。他と異なることに恐れを感じる。その恐れが強くなれば、必然的に「友だちにどう思われるか」という他者の視線あるいは評価がいつも(たいてい)気になってくる。この点で、現代の子どもは昔の子どもよりも「たいてい」が多く、友だちに意識がとられがちになっている、といえる。

この「たいてい気になる」と「気になるほうが多い」を「気になるほう」として一括すると、2014年の子どもは2003年父母世代の子ども時代とほぼ同程度になるが、他とクロスさせてみるとちがってくる。

〈表6〉 「友だちの視線が気になるほう」×「友だちのだれか、そばに来ないで」

		「友だちのだれか、そばに来ないで」を選択	総数
友だちの視線が「気になるほう」の選択者	2003祖父母	12.6%	199
	2003父母	12.4%	1583
	2003子ども	25.9%	1075
	2014子ども	21.1%	887

友だちの視線が気になるなら、友だちとはあまりかかわらなければいい。ところが、友人関係が受け身になると、そばに来る友だちとはかかわってしまう。しかし、内心は「そばに来ないで」と思っている。それが、現代の子どもでは昔よりもおおむね倍増しているようだ。

一方、「気になるほうが少ない」と「気にならない」を一括させて「気にならないほう」とすると、そのうち「友だちのだれか、そばに来ないで」を選択しているケースは、祖父母6.0%、父母7.2%、2003子ども14.0%、2014年子ども14.8%である。どの世代も〈表6〉と比べると、おおむね半減に近くなっていく。他者の視線があまり気にならないければ、他者への拒否感も弱まるというのもとうぜんのことであろう。

何かにつけ友だちにどう思われるかを気にするというのは、それ以前から自分の行動に対してマイナスの評価を友だちから受けていて、それが負の心理傾性を生んで友人関

係に意識がとられてしまう状態のことを意味する。

人はいろいろな面でそれぞれちがうのだから、意見や行動が他と異なるのは基本的には当たり前のことである。しかし、現代の子どもの場合はなかなかそうはいかない、というケースが昔よりも増えている傾向が見える。

4.3 ナーバスと学校適応

現代の子どものほうが「学校に行きたくないと思う」割合が昔よりも増えていることは容易に推察できるが、勉強の出来不出来との関係の視点から見ると、どうであろうか。

①「ふだん（病気や悪天候などの特別の日以外で）『学校に行きたくない』とありますか？」（おとな世代へは「子どもの頃、……とよく思いましたか？」）

選択肢は「よく思う、ときどき思う、一二回は思った、思うことはない」で一つを選択する。

②「学校の勉強は（科目にもよるが、全体としては）できるほうだ、とっていますか？」（おとな世代へは「小中学生時代、……思っていましたか？」）

選択肢は「できるほう、ややできるほう、中くらい、ややできないほう、できないほう」で一つを選ぶ。もちろん自己申告である。つぎの表7では、「できるほう」と「ややできるほう」を「できるほう」、「ややできないほう」と「できないほう」を「できないほう」として一括して示している。

<表7> 成績×学校行きたくない

	勉強	総数	学校に行きたくないと思うか			
			よく	ときどき	一二回	思うことはない
2003祖父母	できるほう	368	1.9%	9.2%	15.2%	73.6%
	中くらい	512	2.7%	17.6%	21.1%	58.6%
	できないほう	195	13.3%	26.2%	12.3%	48.2%
2003父母	できるほう	1827	3.4%	21.1%	33.2%	42.3%
	中くらい	2040	5.0%	24.5%	35.3%	35.1%
	できないほう	1149	11.9%	34.2%	26.4%	27.5%
2003子ども	できるほう	631	12.4%	29.6%	34.9%	23.1%
	中くらい	1116	14.6%	35.2%	31.6%	18.5%
	できないほう	719	25.3%	37.7%	26.0%	11.0%
2014子ども	できるほう	690	13.3%	26.1%	25.7%	34.9%
	中くらい	1185	13.3%	28.9%	23.5%	34.3%
	できないほう	1162	21.1%	32.9%	20.4%	25.6%

勉強ができると、学校での自己存在感が生じやすい。自分の中にそれなりのステータスができているので、学校からの逃避感はあまりない。逆に、「できないほう」であるなら、学校での大半の時間は勉強時間であるので、その時間が苦痛であろうから、逃避感が増えよう。だから、「できるほう」から「できないほう」の段階に比例して「行きたくないと思う」は増えていくのが自然である。

全世代ともおおむねそういう傾向を示しているが、現代の子どもの場合、「できるほう」であるのに「行きたくないと思う」が昔に比べると突出している。勉強自体へのプ

レッシャーが強まったのも理由の一部と思われる面もある（これについては後述する）が、勉強以外の面も十分に考えられる。つぎのデータがある。

<表8> 友だちへの接触拒否感×学校行きたくない

		学校に行きたくない				合計	総数
		よく思う	ときどき思う	1～2回思う	思わない		
「友だちのだれか、そばに来ないで」の選択者	2003祖父母	2.5%	25.9%	14.8%	56.8%	100%	81
	2003父母	7.0%	32.9%	36.4%	23.8%	100%	484
	2003子ども	22.2%	40.1%	24.7%	13.0%	100%	531
	2014子ども	22.1%	33.5%	25.7%	18.8%	100%	526

友だちのだれかへの拒否感が自覚されていると、学校からの逃避感もぐんと強まる傾向が見てとれる。また、つぎの表である。

<表9> 友だちの視線が「気になるほう」×学校行きたくない

		学校に行きたくない				合計	総数
		よく思う	ときどき思う	1～2回思う	思わない		
「気になるほう」のみ	2003祖父母	8.6%	22.7%	18.7%	50.0%	100%	198
	2003父母	9.5%	32.5%	31.0%	26.9%	100%	1604
	2003子ども	22.6%	37.2%	28.8%	11.4%	100%	1073
	2014子ども	20.9%	32.5%	24.1%	22.4%	100%	907

表8と同じである。つまり、友人関係がナーバスになっていると、その分だけ学校に行きたくない層が増える、といえよう。

4.4 昔の子どもと現代の子ども

まとめる。現代の子どもは、昔の子どもに比べると、友人関係に悩む層が増えているといえる。なぜか？

学校生活で友人関係が占める比重は昔とはある程度は異なる。父母祖父母世代に「小中学生時代、学校にいるとき、つぎのどれを楽しいと思いましたか？好きな科目の授業、友だちと話したり遊んだりすること、先生と話すこと、…（中略）…、運動会などのスポーツ行事、楽しいことは何もなかった」とたずねた。「友だちと……」を選択した人を年代別で示す（子ども世代も表示する）。

<表10> 学校で楽しいこと（20代はサンプル数が少ないので参考まで）

	「友だちと話したり遊んだりすること」が楽しい	「友だちと……」選択なし	合計	総数
2003年70代以上	56.9%	43.1%	100%	508
同60代	61.1%	38.9%	100%	514
同50代	69.2%	30.8%	100%	577
同40代	81.3%	18.7%	100%	2620
同30代	85.0%	15.0%	100%	1888
同20代	86.2%	13.8%	100%	94
2003子ども	85.6%	14.4%	100%	2507
2014子ども	81.2%	18.8%	100%	3106

どの年代も選択肢の中では「友だちと……」が第1位である。ところが、50代以上の

3割から4割超は「学校で友だちと遊んだりすること」がとくに楽しいこととは思って
 いなかったのである。友だちづきあいがいやだというわけでもない。「学校でいやなこ
 と」として「つきあいで友だちと……」を選択しているのは表2のとおりで、むしろ現
 代の子どものほうが多い。また、「いやなことは何もない」と思っていたのも、70代以
 上42.3%、60代36.0%、50代24.4%、という具合に減少していき、2003年子どもではじめて
 20%を切って14.2%、2014年子どもで18.7%となっている。

つまり、昔の子どもは、「楽しいこと」に「友だちと……」を選ばなくても「友だちづ
 きあい」を拒否していたというわけではないのである。では、どういうことか？

昔の子ども（とくに上表の50代以上）は、友だちとは適度な距離をとっている傾向が
 あったのではないか。学校生活における友だちの存在は絶対的なものではなく、友人関
 係に意識がとられるということが相対的に少なかった、と見るべきではなかろうか。
 だからこそ、「友だちのだれか、そばに来ないで」も「つきあいで友だちと遊んだりする
 ことがいや」の数値が現代の子どもよりもぐんと少ないのである。しかも、つぎのデー
 タがある。

<表11> 「一緒にいると気持ちの落ち着く（ほっとする）人はだれですか？」

	「友だちのだれか」を選択	選択なし	合計	総数
2003年70代以上	23.90%	76.10%	100%	507
同60代	31.20%	68.80%	100%	507
同50代	42.10%	57.90%	100%	568
同40代	50.00%	50.00%	100%	2592
同30代	45.50%	54.50%	100%	1873
同20代	51.10%	48.90%	100%	94
2003子ども	69.50%	30.50%	100%	2482
2014子ども	74.60%	25.40%	100%	3100

昔の子どもは、ほぼ半数以上が「一緒にいると気持ちが落ち着く人」として「友だち」
 を選択していないのである。友だちに対する拒否感があるわけでもないのだから、距離
 をとっていたと考える以外にない。表示していないが、母親に対してはおよそ60%前後
 が「落ち着く」対象としているところを見ると、自分を身近で見守る人といっしょであ
 るほうが気持ちが落ち着くと考えていた、といえる（現代の子どもは、母は40%台で、
 友だちよりも少ない）。

現代の子どもは、友だち群の中に埋没するかのような形で暮らしているように見える。
 だから、「学校で友だちと遊んだりすることが楽しい」が80%を超えながら、逆に、友だ
 ちへの接触拒否感が昔よりも増え、「つきあいで……」の拒否感も増えている。友だちの
 存在に過敏に反応していることの証左であろう。そういう点から見ると、現代の子ども
 は友人関係に意識がとられやすい状況の中で生きているといえよう。

要するに、現代の子どもの友人関係における特質は、友人関係においてナーバスにな
 りがちで、いつもどこかに関係への不安感をもって学校生活を送っている点にある、と
 いえるであろう。

5 2003年調査の子どもと2014年調査の子どもの比較

これまでの表でも見えていたように、2003年調査の子どもと2014年調査の子どもとを直接比較すると、数値が微妙に変化しているところがある。それを以下で指摘していく。今後の学校教育のあり方を考えるための資料とすることが目的である。

5.1 「ナーバスさ」の低減

これまでの表の中の子ども部分だけをいくつか抜き出してみる。

<表12> 子ども相互の比較

		そばに来ないでほしい人-「友だちのだれか」を選択					総数	
2003子ども		21.60%					2477	
2014子ども		19.60%					2953	
		学校でいやなこと-「つきあいで友だちと話すこと」を選択					総数	
2003子ども		7.60%					2494	
2014子ども		5.40%					2892	
		友だちの視線が気になるか					合計	総数
	たいてい	多い	半々	少ない	気にならない			
2003子ども	19.40%	24.30%	33.60%	13.60%	9.20%	100%	2489	
2014子ども	13.00%	17.40%	37.50%	15.90%	16.20%	100%	3102	

上に見るとおり、「ナーバスさ」は低減しているようだ。前のクロス表でも、2014年の子どものほうが「ナーバスさ」は低くなっている（「学校に行きたくないか」については後述）。

上表の三つ目（友だちの視線）を学校種別にみてる（「たいてい気になる」と「気になるほうが多い」を「気になるほう」、「気になるほうが少ない」と「気にならない」を「気にならないほう」として一括して示す）。

<表13> 友だちの視線が気になるか（学校種別）

	気になるほう	半々	気にならないほう	合計	総数
2003高校生	50.1%	31.5%	18.4%	100%	918
2014高校生	29.7%	37.5%	32.8%	100%	947
2003中学生	43.1%	36.1%	20.8%	100%	687
2014中学生	31.6%	37.4%	31.0%	100%	1486
2003小学生	37.3%	33.9%	28.7%	100%	884
2014小学生	29.1%	37.5%	33.3%	100%	669

高校生では、「気になるほう」の減少と「気にならないほう」の増加が目立つ。小学生と中学生でも同じような傾向であり、「半々くらい」とで三極化したようだ。昔の子どもに比べると「ナーバスさ」は相変わらずだが、この十年ほどの間にその傾向がやや緩和された、と言える。なぜなのか？ これについては後述する。

5.2 学校適応児童生徒の増加

学校逃避感を学校種別で見てみる（前記のとおり、設問は「ふだん（病気や悪天候などの特別な日以外で）『学校に行きたくない』と思うことはありますか？ よく思う、ときどき思う、1～2回は思った、思うことはない」である）。

<表14> 学校に行きたくないと思うか（学校逃避感）

	よく思う	ときどき思う	1～2回思った	思うことはない	合計	総数
2003高校生	22.0%	39.8%	26.5%	11.7%	100%	909
2014高校生	24.1%	31.4%	17.4%	27.1%	100%	959
2003中学生	17.0%	32.8%	32.8%	17.5%	100%	687
2014中学生	14.6%	28.7%	26.6%	30.2%	100%	1416
2003小学生	12.3%	30.2%	33.7%	23.8%	100%	878
2014小学生	9.0%	29.3%	22.6%	39.1%	100%	676

小学生、中学生、高校生ともに、学校に行きたくない「思うことはない」と回答した割合が2003年調査に比べて増加した。表のように、高校生では「思うことはない」の割合が11.7%→27.1%へ、中学生17.5%→30.2%、小学生23.8%→39.1%、とそれぞれ10ポイント以上の増加である。学校に適応している子どもの割合が増加していることを示唆する。友人関係のナーバスさがいくらかでも低減すれば、その分、友だちといっしょの学校生活からの逃避感をもつ層も減り、全体的に学校に適応する層が増加した、といえる。

しかし、学校に行きたくない「よく思う」ものの割合の変化を見ると、あまり差がみられない。学校へ適応している子どもが増加している一方で、適応できていない子どもの割合は全体としてはあまり減っていないという結果となった。これは、なぜか？

勉強の出来不出来と学校逃避感との関係を見てみる。「学校に行きたくないと思う」だけについて、高校と中学で見てみたのがつぎの表15である。

前述のように、勉強ができるほうからできないほうへ段階的に「学校に行きたくないと思う」層が増えていくというのが自然で、2003年は中高ともおおむねそういう傾向を見せている。ところが、2014年になると、中高ともに「できるほう」と自認している層のほうが「ややできるほう」「中くらい」「ややできないほう」の層よりも学校逃避傾向が強まっているのである。どういうことか？

長期的なスパンで見ると、社会が「学校化社会」に変化することによる進学圧力・勉強圧力の高進があげられよう。かつては特段の努力なしに良い成績をあげられる子どもが実際に良い成績をあげて「できる」子になっていたのに対し、現代では周囲の圧力や支援のもとで努力してよい成績をあげて「できる」ようになる子どもたちが増えている、といえるのではないか。

<表15> 成績×学校逃避感（高校と中学）

	勉強は……	学校行きたくない と「よく思う」	総数
2003高校生	できるほう	17.1%	35
	ややできるほう	17.0%	135
	中くらい	18.4%	392
	ややできないほう	22.4%	174
	できないほう	34.9%	169
2014高校生	できるほう	35.6%	45
	ややできるほう	19.1%	115
	中くらい	21.3%	356
	ややできないほう	21.5%	200
	できないほう	30.7%	241
2003中学生	できるほう	11.4%	44
	ややできるほう	10.1%	119
	中くらい	16.6%	277
	ややできないほう	18.2%	132
	できないほう	25.4%	114
2014中学生	できるほう	19.1%	89
	ややできるほう	10.7%	206
	中くらい	10.7%	512
	ややできないほう	11.5%	304
	できないほう	25.3%	297

とくに、2003年と2014年との比較に関していえば、2003年は「ゆとり教育」時期だったが、2014年では（2012年から現行の学習指導要領の全面実施により）、小学1、2年では週2時間、小学3年から中学3年では週1時間の授業時数増がおこなわれたことによる学習負担の増加、「ゆとり教育批判」に見られるような学力重視の風潮が圧力として格段に強まったこと、という点が挙げられる。

この学習圧力の強化の結果、学習競争に積極的に参加しようとしている層で学校逃避感が高まったと考えられる。一方、学習競争からちょっと外れた子どもや部活などの別のことがらに日々の生きがいを見出している子どもでは、学校逃避感が高まっていないのである。

つまり、「学校に行きたくないと思う」層が全体的にあまり減っていないのは、友人関係の面よりも、「勉強ができる」子の学習圧力による学校逃避感の増進が要因と思われる。

5.3 友人の視線と学校適応の関係

友人の視線が気にならない層がこの十年で増えたが、学校適応との関係はどうか

(以下、小中に重点を置いて見ていく)。

<表16> 友だちの視線と学校適応

	友だちの視線は……	学校に行きたくないと思うことがあるか				合計	総数
		よく思う	ときどき	1～2回	思うことはない		
2003中学生	気になるほう	20.6%	35.8%	32.1%	11.5%	100%	296
	半々くらい	13.0%	32.9%	37.4%	16.7%	100%	246
	気にならないほう	17.0%	26.2%	26.2%	30.5%	100%	141
2014中学生	気になるほう	18.8%	31.0%	30.0%	20.2%	100%	436
	半々くらい	13.6%	31.9%	25.1%	29.4%	100%	521
	気にならないほう	11.0%	23.4%	25.2%	40.4%	100%	436
2003小学生	気になるほう	20.6%	33.8%	29.5%	16.0%	100%	325
	半々くらい	9.2%	28.0%	41.6%	21.2%	100%	293
	気にならないほう	5.6%	27.5%	29.5%	37.5%	100%	251
2014小学生	気になるほう	12.5%	34.4%	21.4%	31.8%	100%	192
	半々くらい	5.6%	33.1%	23.8%	37.5%	100%	248
	気にならないほう	9.5%	20.0%	22.3%	48.2%	100%	220

小学生、中学生ともに、友だちにどう思われるかが「気にならないほう」ほど、学校に行きたくない「思うことはない」が多い。つまり、ナーバスさが弱いほど学校に適応しているという結果となった。2003年から2014年にかけてこの傾向に変わりはないが、ナーバスさの程度にかかわらず学校適応が改善してきていることが見てとれる。

5.4 友人数の増加

「仲のいい友だちは何人いますか？」

昔の子どもは、6割ほどが「3～5人」を選んでいる。他の人数の選択よりも群を抜いて多い。「10人以上」は1割程度でしかない。現代の子どもはどうか？ つぎのとおりである。

<表17> 友人数

	1人もいない	1人	2人	3～5人	6～9人	10人以上	合計	総数
2003中学生	0.7%	0.7%	2.5%	26.3%	23.9%	45.8%	100%	674
2014中学生	0.9%	1.1%	2.2%	18.9%	16.5%	60.4%	100%	1420
2003小学生	0.7%	2.1%	3.9%	25.3%	20.8%	47.2%	100%	870
2014小学生	0.3%	2.0%	5.1%	19.6%	16.4%	56.6%	100%	684

現代の子どもの場合、「仲のいい友だち」数は「10人以上」が圧倒的である。細かく見ると、この十年ほどの間に、その「10人以上」の割合が増加し、「3～5人」「6～9人」は減少している。

携帯電話を所有する子どもが増えていると思えるので、それが友人数の増加に関係しているのではないかと、という見方もあるが、それはちがう。

本論と直接の関係がないので以下簡潔に述べる。中学生を例にとると、「10人以上」は、携帯所有者で2003年48.4%→2014年61.8%と13ポイントほど上昇しているが、非所有者でも2003年42.8%→2014年58.4%と15ポイントも上昇しているのである。この十年ほどで携

携帯電話所有の割合は増加しているが、その増加自体が友人数の増加に影響をもたらしているとはいえない（ただし、統計的な有意差は見られなかった）。

問題は、友人数の増加が他の何にかかわっているかである。

5.5 友人数と「ナーバスさ」

「友だちの視線が気になる」は友人数とどう関係するか。中学生だけで見てみる（「1人もいない」から「2人」までは該当数が少ないので「2人以下」として集計する）。

<表18> 友人数×友だちの視線

			何かをするとき友だちの視線が気になるか			合計	総数
			気になるほう	半々	気にならないほう		
2003中学生	友人数	2人以下	51.9%	18.5%	29.6%	100%	27
		3～5人	42.4%	37.9%	19.8%	100%	177
		6～9人	45.3%	37.3%	17.4%	100%	161
		10人以上	40.3%	36.4%	23.3%	100%	305
2014中学生	友人数	2人以下	36.8%	42.1%	21.1%	100%	57
		3～5人	38.5%	37.0%	24.4%	100%	262
		6～9人	31.2%	40.7%	28.1%	100%	231
		10人以上	28.5%	36.4%	35.1%	100%	849

「2人以下」の場合、2003年は「気になるほう」が半数を超えているのが目立つ。友だちが少ないということは、まわりの視線が脅威となって、だんだん内向化し、結局は友だちが少なくなる、ということであろう。

表13に見るとおり、2014年は全体として「気になるほう」は減ってきているので、友人数におおむね相応して推移しているが、「10人以上」ではそれが10ポイント以上も減少している点が目につく。逆に、「10人以上」の場合、「気にならないほう」が2003年23.3%→2014年35.1%と大幅増である。上表とおり、どの層でも「気になるほう」は「気にならないほう」を上回っているが、2014年の「10人以上」だけが逆転している。友人数が増加したことが全体的に友だちの視線が気にならない層を底上げした、といえる。

友だちがたくさんいることは、学校での孤独感が発生しにくく、友だちの視線を浴びても救ってくれる友だちが別に存在しているだろうから、その視線を受け流すくらいの心のゆとりさが育っているのかもしれない。

表の提示は省略するが、「友だちのだれか、そばに来ないで」や「つきあいで…がいや」との関係を見ても、友人数が多いほど該当する数値が低くなり、友人関係のナーバスさの低減につながっているようだ。

友人数と学校適応の関係はどうか。

とうぜんのことだが、友人数が多ければ多いほど、おおむね学校適応が増す。とくに小学校での友人数との関係が顕著であるので、つぎに示す。

<表19> 友人数と学校適応（「学校に行きたくないと思うか」：よく思う，……）

		学校に行きたくないと思うか				合計	総数	
		よく	ときどき	1～2回	思うことはない			
2003小学生	友人数	2人以下	22.4%	31.0%	25.9%	20.7%	100%	58
		3～5人	14.4%	34.9%	34.4%	16.3%	100%	215
		6～9人	10.6%	29.6%	39.1%	20.7%	100%	179
		10人以上	10.2%	28.0%	32.5%	29.3%	100%	403
2014小学生	友人数	2人以下	20.4%	34.7%	18.4%	26.5%	100%	49
		3～5人	9.0%	32.3%	26.3%	32.3%	100%	133
		6～9人	8.1%	38.7%	19.8%	33.3%	100%	111
		10人以上	7.9%	24.9%	22.8%	44.5%	100%	382

2014年の小学生の場合、友人数「10人以上」で「行きたくないとは思うことはない」が突出的に増えている。半数近くになる。これが表14の全体傾向を底上げしたものと推察できる。

5.6 教師と学校適応の関係性

表19に見られるように、友人数が多くても学校に行きたくないと思いがちな子どもは存在している。小学生では、2003年よりもいづらか減ったとはいえ、2014年小学生の友人数「10人以上」でも「学校に行きたくないをよく思う」が8%ほどはいる。これは、学校適応は友人数だけの問題ではなく、他の要因も関わっていることを示している。

2014年調査では「ここ一年間で学校の先生から『ほめられた』ことはありますか」という問いを設けた（2003年調査ではその問いはない）。友人数「10人以上」のみの集計で、この問いと学校適応との関連を調べると、つぎのようになる。

<表20> 友人数「10人以上」×ほめられた経験×学校適応（学校に行きたくないと思うか）

2014中学生：友人数「10人以上」のみ		学校に行きたくないと思うか				合計	総数
		よく思う	ときどき思う	1～2回は	思うことはない		
ほめられたことは？	よくあった	10.1%	18.0%	23.0%	48.9%	100%	139
	ときどき	8.9%	30.0%	26.4%	34.7%	100%	447
	1～2回	14.1%	27.2%	33.5%	25.1%	100%	191
	なかった	33.8%	23.9%	15.5%	26.8%	100%	71

ほめられた経験が少ないほど、学校に行きたくない「よく思う」が増える。逆に、「思うことはない」が少なくなる。学校適応の問題は、友人関係だけではなく、教師との関係も重要であることが見えてくる。

6 教師との関係の良好化

今回の調査で特徴的なのは、子どもと教師の関係が良好化していると推察できるデータが出てきたことである。これが友人関係のナーバスさの低減にかかわっていると考えられる。

6.1 教師の好感度

「学校にいるとき、つぎのどれを楽しんでいると思いますか？」という問いで「先生と話

すこと」を選択した子どもはどれほどいるか？ 昔の子ども，2003年，2014年の小中学生を見てみる。

<表21> 「先生と話すこと」が楽しい

	学校で先生と話すことが楽しい	総数
2003祖父母	8.3%	1106
2003父母	5.9%	5095
2003中学生	6.5%	691
2003小学生	7.2%	893
2014中学生	7.4%	1493
2014小学生	12.0%	666

2014年の小学生ではじめて10%台になった。教師との関係がいくらか良好になってきたことを物語るのではないか。

「そばに来ないでほしい，とあなたがいつも思っている人はだれかいますか？」で「学校のある先生」を選択した子どもはどうか？

<表22> 先生への接触拒否感

	そばに来ないで「ある先生」	総数
2003祖父母	5.9%	1106
2003父母	8.8%	5095
2003中学生	21.5%	691
2003小学生	10.5%	893
2014中学生	14.4%	1493
2014小学生	5.9%	666

2014年の小学生の場合，2003年調査で10.5%だったのが，2014年調査では5.9%と減少していた。この数値は，2003年時の祖父母世代の子ども時代の数値と同じである。中学生ではまだまだ14%台であるが，それでも2003年時よりもぐんと減少している。

6.2 教師の信頼性

「なにか悩みがあったとき，だれに相談しますか？」(父，母，……，友だちのだれか，学校のある先生，……相談する人はいない)

悩みがあるとき相談できる人がいると生活に安心感もてる。たいていは母親が相談相手になる。現代の子どもでは「友だちのだれか」に相談するケースも多い。しかし，「学校の先生」が選ばれるのは昔から少なかった(2003年祖父母6.3%，父母4.3%)。それが2014年に10%を超えてきた。教師の信頼性が増幅してきたのではないか。

<表23> 悩みの相談相手

	悩みの相談相手，先生	総数
2003中学生	8.3%	687
2003小学生	8.8%	884
2014中学生	10.2%	1493
2014小学生	13.5%	666

この問いについて，「学校にいるときなにかがいやですか？」で「いじめられること」を

選択している子どものみで集計すると、どうなるか？ 小学生で見てみる。

<表24> いじめられる子の相談相手

		悩み、だれに相談？ 学校のある先生	総数
学校でいやなことは 「いじめられること」	2003小学生	12.2%	181
	2014小学生	23.3%	146

「いじめ」以外で先生に相談することもあるだろうが、いじめられている子どもに限定すると、2003年12.2%から2014年23.3%へと増加した。必ず「いじめ」を相談しているとはかぎらないけれど、学校において弱い子どもが学校の中心軸になる教師に何かを相談しているという事実が<教師—子ども>関係がこの十年ほどで良好化している証左となるだろう。

7 今後の課題

前述のとおり、友人関係におけるナーバスさがいくらか低減してきており、<教師—子ども>関係も良好化の兆しが見えてきている。なぜこうなったのであろうか？ それ本研究のつぎの課題である。

私たちは、学校における「生徒指導システム」がこの十年ほどの間に変化してきているのではないかと、という仮説をもっている。どういうことか？

「生徒指導」とは、基本は「子どもの自律性の形成を目的とする学校における支援活動」のことをいい、「社会性の発達とアイデンティティ（自己肯定感）の形成支援」を構成要素とする活動である。この生徒指導は、実際のところ、学校/学級経営、各授業、道德教育、特別活動、いわゆる生活指導/生徒指導領域など広範囲にわたって子どもの自律化支援としておこなわれており、それを「生徒指導システム」と私たちは呼ぶ。

この十年ほどの間に、その生徒指導システムが実体として変化してきているのではないかと。子ども間の友人関係に作用する教師の何らかの指導（たとえば、集団活動時における指導）の変化、教師が子ども（児童生徒）の言動に対応する姿勢の変化などにおいて、ある程度の成果が現れる方向に進んできているのではないかと。

学校とは関係のないところでのことが要因で子どもに変化が起きているだけのこともかもしれない。しかし、学校に適應する層が増加している点を考えると、学校内に変化の要因を見ることは自然であろう。だから、上記のことを仮説とする「生徒指導システムのあり方に関する実証的研究」が必要になる。

注

- 1) 藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳「小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究：全国9都県での質問紙調査の結果より」東京大学大学院教育学研究科紀要第36号，

1996年

- 2) 中島喜代子・小長井明美・木屋真依「世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究—個人的居場所の場合」三重大学教育学部研究紀要第57号, 2006年
- 3) 岡田努「現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成: 傷つけ合うことを回避する傾向を中心として」金沢大学人間科学系研究紀要第4号, 2012年
- 4) 長田勇, 櫻井誠「現代の子どもの友人関係における特質—序論—」小池学園研究紀要, 第11号, 2013年
- 5) 長田, 遠藤「世代間比較調査『少年の世界』—友人関係意識の現状と学校教育の課題—」宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 第27号 2007年